「セアंक文書」に記録された夫婦の財産契約
——「セアंक」の再検討——

Property Contracts between Husbands
and Wives Recorded on “*s'nh*-documents”:
Reexamination of “*s'nh*”

小 野 幾 代
ONO Ikuyo

ABSTRACT In Egypt, from the Third Intermediate Period to the Roman Period, hieratic or demotic documents concerning property contracts were made between husbands and wives. In this paper, I will examine one group of these documents, “*s'nh*-documents”, written in demotic.

S'nh-documents have generally been interpreted as “documents of maintenance” or “annuity contracts” from the meaning of the word “*s'nh*” (lit., “to make live”) or the clause referring to the annual subsistence which husbands were to provide for their wives. Furthermore, the property called “*s'nh*” which wives entrusted to their husbands also has been looked at as “maintenance” or “annuity” for wives. However, I do not agree with these interpretations for the following three reasons: (1) the word “*s'nh*” has not been sufficiently examined, (2) these interpretations conflict with the social custom of the time in which it was obligatory for husbands to support their wives, and (3) the clause referring to the annual subsistence for wives is also used in other documents made by couples without the word “*s'nh*”, but nonetheless, these have not been looked at as “documents of maintenance” or “annuity contracts”.

The aim of this paper is to reexamine the meaning of “*s'nh*” and to offer an alternative interpretation for the property contracts recorded on the “*s'nh*-documents”. First of all, through a comparison of the *s'nh*-documents and the other documents made by couples, I will show that the meaning of *s'nh* is not related to the contents of the property contracts recorded on the *s'nh*-documents but to features of the property itself. Second, through the

* 早稲田大学大学院博士後期課程
Ph. D. Student, Waseda University

examination of the features of the *s'nh* as property found in other sources, I will show that wives' *s'nh*s meant the property which wives were allowed to possess on the basis of some specified qualifications. Therefore, we can look at the *s'nh*-documents as documents which were made to confirm that the wives' *s'nh*s had been entrusted to their husbands and to show wives' rights and husbands' duties. According to these interpretations, I will also offer an interpretation for the clause referring to the annual subsistence for wives, through a comparison of the *s'nh*-documents and the other documents made by couples or the documents concerning the loans; the subsistence was the fine which husbands had to pay when they failed to return *s'nh* on the due date. This clause guaranteed wives against arrears of the return of *s'nh*.

I. はじめに

古代エジプトでは、夫婦の間で様々な財産契約が結ばれていた。例えば、夫から妻への財産贈与、妻から夫への財産委託、妻の生活費、相続に関する契約等である。契約は多数の証人のもとで結ばれ、書記によってパピルスに記録された。それらは従来「婚姻文書」と総称され、当時の婚姻を解明する上で有益な史料として研究されてきた。しかし、「婚姻文書」という名称は、文書の主旨を婚姻締結の承認であると誤解していた初期の研究の名残である。筆者は、この名称はもはや使用されるべきではないと考え、本稿ではこの種の文書を「夫婦財産契約文書」と呼ぶ。現在までに知られている夫婦財産契約文書は、第3中間期からローマ時代にかけて作成されたものであり、史料数が最も多いのはプトレマイオス朝時代である。使用言語は、大部分がデモティックであるが、ヒエラティックのものもある。

夫婦財産契約文書の中で特に重要視されてきたのは次の3形式である：⁽¹⁾ (1)「妻の書 (*sh n hm.t*)」、(2)「妻になるための金銭 (*hd n ir hm.t*)」のことが記録された文書、(3)「セアंक文書 (*sh n s'nh*)」と「支払文書 (*sh n db• hd*)」⁽²⁾ 本稿では、これらのうち、セアंक文書を考察対象とする。

セアंक文書は、紀元前522年から紀元後21年まで存在していたことが確認されている。⁽³⁾ また、セアंक文書の多くはファイユーム地方に集中しているが、セアंक文書に関連した史料はエジプト各地から発見されている。それゆえ、

この文書に記録された契約は、当時エジプトで一般的に交わされていた契約であると考えられる。

セアंक文書は、他の形式の夫婦財産契約文書と同様、文書が作成された年月日、文書の発行人（夫）受取人（妻）の明示、財産契約（夫から妻への表明・約束）、文書を執筆した書記の署名の順で構成されている。パピルス裏面には証人の名前が記されている。

<セアंक文書の例>

< 1 > h3.t-sp 1.t ibt 4 šmm n P[r-]3⁽⁴⁾.[w.]s. 3lygsntrs d htmw-ntr wyt P3-ti-Wstr s3
'nh-Hp muw.t=f is.t-wr(.t) n s-hm.t 'nh.t s3.t n htmw-ntr wyt 'nh-mr-wr muw.t=s Ps3 t3-t
mtry h3.t=y n h3 10 n n3 tni.wt nt n pr-h3 n Pth n wth r h3 9 qt 9 5/6 1/10 1/30 1/60
1/60 r h3 10(n) n3 tni.wt nt n pr-h3 n Pth n wth 'n < 2 > n p3⁽¹⁾y⁽¹⁾=t s'nh mtw n3 hrt.w
nt[hw=t r]ms.t.w n=y nt nb nk nb nt mtw=y hn⁽¹⁾ n3w nt lw=y r t3 h3r=w n pr 3h inh
wrh b3k b3k.t ih.t 3 tp-n-i3w.t nb t3w.t nb qnb.t nb mt (n) rmt-nmh.w nb n p3 t3 mtw=y
mtw=y t3.t n=t bt 36 n t3 hn 40 r t3 24 n t3 hn 40 r bt 36 (n) t3 hn 40 'n h3 1 qt 2 n n3
tni.wt nt n pr-h3 n Pth n wth r h3 1 qt 1 5/6 1/10 1/30 1/60 1/60 < 3 > r h3 1 qt '2⁽¹⁾
n n3 tni.wt nt n p[r-h3 n Pth n wt]h 'n n p3y=t 'q-hbs hr rnp.t r p3⁽¹⁾.wy nt mr=t s mtw=t
t3 nt nhe.t r t3 wd3y n p3y=t 'q-hbs nt lw=s r h3r 'wy=y mtw=y t3.t s n=t nt nb nk nb nt
mtw=y hn⁽¹⁾ n3w nt lw=y r t3 h3r=w n(?) pr 3h inh wrh b3k b3k.t ih.t 3 tp-n-i3w.t nb
i3w.t nb qnb.t nb mt n rmt-nmh.w nb n p3 t3 mtw=y < 4 > st h[pr] n lw[.t n p3y=t s'nh]
nt hry bn lw=y rh d n=t 's⁽¹⁾p p3y=t s'nh nt hry p3y=t sw n wh3=f lw=y r t3.t s[n=t n-i]m=f
bn lw=y rh t3.t 'nh m-s3=t hn⁽¹⁾ p3 m[tre n] p3 sh nt hry p3 bnr n p3⁽¹⁾.wy nt lw n3 wpty.w
n-im=f m-sh M3⁽¹⁾-R⁽¹⁾ s3 D-Hnsw-lw=f-'nh

「アレクサンドロス王——生き、[栄え]、健やかならんことを！——の治世1年シェムウ4月。神の印璽官であり、ミイラ職人であり、アंक-ヘプの息子であり、母はイセト-ウレットであるパーティ-ウシルは、神の印璽官であり、ミイラ職人であるアंक-メル-ウルの娘であり、母はベセットである、女性アuketに（以下のことを）言った。『あなたは、あなたのセアंकとしての、プタハ（神）の宝庫の単位（で量られた）、洗練された銀10（デベン）——（それは）、銀9（デベン）（と）9、5/6、1/10、1/30、1/60、1/60キテになり、（それらを合計すると）、再び、プタハ（神）の宝庫の単位（で量られた）、洗練された銀10（デベン）になる——で、私の心を満足させた。（以下のものに関して）、私が所有しているものと、私が獲得することになるものは全て、[あなたが] 私に生むことになる子供たちのものである。家、耕地、中庭、建設用地、僕、女僕、牛、ろば、全ての動物、全ての官職、全ての権利証書、私に属する世界の自由人のこと全て。そして、私はあなたに、あなたが好むあらゆる家での、あなたの年間の生活費としての（以下のものを）与える。40ヒン（の

計量単位で量られた) エンマ小麦36 (サックス)——(それは), 40ヒン (の計量単位で量られた) 大麦24 (サックス) になり, 再び, 40ヒン (の計量単位で量られた) エンマ小麦36 (サックス) になる——(と), プタハ (神) の宝庫の単位(で量られた), 洗練された銀1 (デベン) 2 キテ——(それは), 銀1 (デベン)(と) 1, 5/6, 1/10, 1/30, 1/60, 1/60 キテになり, (それらを合計すると), 再び, [プタハ (神) の宝庫] の単位 (で量られた) [洗練された] 銀1 (デベン) 2 キテになる——。あなたは, 私が負担することになる, あなたの生活費の延滞料に関して権限を有する者である。そして, 私はあなたにそれを与える。家, 耕地, 中庭, 建設用地, 僕, 女僕, 牛, ろば, 全ての動物, 全ての官職, 全ての権利証書, 私に属する世界の自由人たちのこと全てに関して(?), 私が所有しているものと, 私が獲得することになるもの全ては, 上記の, [あなたのセアंकの] 担保となる。私はあなたに「上記の, あなたのセアंकを受け取れ」と言うことができない。しかし, あなたがそれを望めばいつの日でも, 私は [あなたに] それを与える。私は, 裁判官たちがいる家以外で, あなたからも, 上記の文書の証人からも, 宣誓を要求することができない。」
 ジュ-ケネスウ-イウ-エフ-アंकの息子マア-ラが記した。⁽⁵⁾※裏面に証人リスト (24名)」(P. O.I. 25257: Hughes and Jasnow 1997: 16-18, Pls.8-13)

財産契約は, 従来, 以下のような条項から成り立っているとされてきた。⁽⁶⁾

- ① 夫は妻からセアंक (s'*n*h) を受け取った。
- ② 夫婦の間に生まれる／生まれた子供が夫の財産の相続人となる。
- ③ 夫は妻に年間一定量の穀物と銀を妻の生活費として与える。
- ④ 妻への生活費の支給が遅れても, 妻は生活費に対して権限を持ちつづけ, 最終的には支給される。
- ⑤ 夫の財産はセアंकとセアंक文書に明記された妻への義務に対する担保である。
- ⑥ 夫の方から一方的に妻にセアंकを返却することはできない。セアंकは妻が望む日に返却される。
- ⑦ 夫は法廷以外で妻に宣誓を課すことができない。

条項のこのような解釈をもとに, セアंक文書は, 従来, 夫が妻の扶養義務を明確化するために作成した「扶養文書」もしくは「年金契約」と考えられ, セアंकも「扶養料」もしくは「年金」と訳されることが多かった。⁽⁷⁾こうした認識を前提として, セアंक文書が, 婚姻という枠組みの中でどのように意味づけられるか考察されてきた。しかしながら, 初期のシュピーゲルベルク (Spiegelberg 1906) から近年のスミス (Smith 1995) に至るまで, 数々の形式

分類法が提示されてきたにも関わらず、結局は、各形式の共通点や相違点を指摘するに留まっており、堂々めぐりの感が拭えない。行き詰まりの原因は、セアंक文書に対する根本的な認識にあると考えられる。そこには、多くの問題ないしは矛盾が存在しているからである。

まず、セアंकという言葉に対する従来の説を検討してみよう。例えば、セアंकは、その構成——使役(セ)+動詞「生きる(アंक)」——から、本来、「生かしておくこと」や「扶養すること」を意味する名詞である (Erichsen 1954: 410; Erman and Grapow 1982: 46-47) ということが、繰り返し言われてきたにすぎない。また、セアंक文書が当時ギリシア語で「シングラフェー・トロフィティス (*συγγραφή τροφίτις*)」、すなわち、「扶養に関する文書」ないしは「扶養を保障する文書」と呼ばれていたこと (Boak 1926: 100-109; Pestman 1961: 107, 222) も言及されてきたが、このギリシア語の名称は、セアंक文書だけではなく、他の形式の夫婦財産契約文書にも使用されていることが確認されているため (Pestman 1961: 48, 146, no. 2 and 222)、セアंकの語義決定の論拠としては不十分である。

また、セアंक文書によって夫が妻の扶養を保障するという認識は、夫が妻を扶養するのは当然の義務であったという当時の社会慣習に関する認識との間に矛盾を生み出している。なぜなら、セアंक文書の作成は、合法的な婚姻を成立させるための必須条件ではなかったからである (Junker 1921)。すなわち、セアंक文書を作成しなくても合法的な婚姻は成立し、かつ、妻の扶養は夫の当然の義務であった社会で、何故わざわざ夫婦はセアंक文書を作成し、妻の扶養を保障するのかという疑問が生じるのである。こうした疑問に対して、様々な見解が提示されてきた。例えば、セアंकの委託を名目上あるいは虚構とする見解 (Nims 1938: 76-77; Pestman 1961: 106-107; Smith 1962: 175)、セアंकを夫婦が離婚する場合に妻に与えられる財産であるとみなす見解 (Junker 1921: 50; Boak 1926: 12, 108; Pestman 1961: 107; Allam 1975: 1172; Smith 1995: 53) 等がある。さらに、離婚との関連においては、夫婦が離婚しても妻がセアंकの返却を要求しなかった場合、あるいは、返却を要求してから実際に返却されるまでの間、夫は妻を扶養しなければならなかったという見解も提示されてきた (Nims 1938: 77; Pestman 1961: 71; Allam 1985: 51; Johnson 1994: 125; Smith 1995: 54)。しかしながら、こうした見解は推測の域を出ていない。

さらに、妻の扶養義務に関して言及していると考えられている、妻の生活費および延滞料に関する条項（③と④）は、他の形式の夫婦財産契約文書にも出現している。それらの文書の主旨は、財産の委託や贈与、および、それらによって生じる夫婦間の権利・義務関係の明確化であると考えられてきたにも関わらず、セアंक文書のみ「扶養文書」もしくは「年金契約」とされてきた。

本稿は、こうした問題や矛盾を有する従来のセアंक文書の解釈に対して、セアंकという言葉の概念を再検討することによって、新しい知見を提示することを目的としている。

II. 委託財産としてのセアंक

セアंक文書に見られるような妻から夫への財産委託は、他の2形式の文書にも見られる。妻の書では「女性の財産」が、もう1つの形式の文書では「妻になるための金銭」⁽⁸⁾が、妻から夫に委託されたことが記録されている。セアंक文書とこれら2形式の文書について、妻から夫へ委託された財産の内容と価値、財産契約の条項を概観すると、次のような点に気がつく⁽⁹⁾。

まず、委託財産の内容と価値に注目してみると、セアंक文書独自の特徴がはっきりと確認できる。例えば、委託財産の内容を見ると、セアंक文書で委託されている財産（セアंक）は、常に「プタハ（神）の宝庫の単位（で量られた）⁽¹⁰⁾、洗練された銀」で申告されている。一方、妻の書で委託されている「女性の財産」は装飾品、衣服、家財道具、家畜、穀物等であり、それらの価値は、銅、銀、金、「小金(*nb hm*)」によって、もう1つの「妻になるための金銭」は、常に銅で申告されており、明白な相違がある。次に、委託財産の価値を見ると、セアंकは銀6～51デベンであるが、用例としては銀21デベンが最も多い。一方、「女性の財産」は、「小金」等、銀や銅への換算率が不明なものや、価値が申告されていない品物が含まれている場合もあるため、正確に価値を評価することは困難である。評価が可能なものを見ていく限りでは、銀に換算すると0.6～9.8デベン程度である⁽¹¹⁾。また、「妻になるための金銭」は、銀に換算すると0.3～3.3/6.7デベンである。このように、セアंक文書は、委託財産の内容が常に「プタハ（神）の宝庫の単位（で量られた）、洗練された銀」であり、その価値は他の2形式の文書で委託されている財産の価値よりも相対的に高価であるという点で、他の2形式の文書と異なっていることが理解される。

他方、財産契約の条項に注目してみると、セアंक文書と他の2形式の間に大きな相違はないことが確認できる。例えば、セアंक文書の条項の中で、夫の財産の相続人に関して言及している条項(②)は、妻の書にも記録されており、妻の生活費および延滞料に関する条項(③・④)もまた、他の2形式の文書に見られる。また、財産の受取、担保、返却に関して言及している条項(①・⑤・⑥)も、表現上の違いはあるが、委託財産の所有権と返却に関する妻の権利を保障しているという点で他の2形式の文書の条項と共通している。したがって、条項に関しては、セアंक文書独自の特徴はほとんどない。そうなる
(12)
(13)
(14)
(15)

と、セアंकの概念を考えていく上で、条項からの検討は不適切である。すなわち、セアंकを、妻の生活費および延滞料に関する条項の解釈に基いて「扶養料」もしくは「年金」と訳すべきではない。

むしろ、委託財産の内容と価値にあらわれるセアंक文書独自の特徴を考慮すると、セアंकの概念は、妻が夫に委託する財産そのものの特徴に関係していると考えられる。

III. 他の文書におけるセアंकの用例

「セアंक」と呼ばれる財産は、セアंक文書の他、財産の売却や譲渡の際に作成される「支払文書 (*sh n db3 hd*)」や「権利譲渡文書 (*sh n wy*)」、遺産分与の際に作成される「分配文書 (*sh tni.t ps*)」等の財産契約文書からも知られている。ここでは、それらの特徴を検討し、セアंकの意味内容がどのようにに限定され得るか考察する。⁽¹⁶⁾以下、用例を挙げ、それぞれの特徴を確認する。

a. 「神の印璽官、ミイラ職人のセアंक (*p3 s'nh htmw wyt*)」⁽¹⁷⁾

「神の印璽官」や「ミイラ職人」とは、ネクロポリスで葬送儀礼を司っていた人々を指し、「神の印璽官、ミイラ職人のセアंक」とは、ネクロポリスに属する葬祭施設や礼拝堂において、彼らに収益を利用する権利が認められていた財産を指す。⁽¹⁸⁾P. Ashmolean D 1; 3; P. BM 10605; 10606 等によれば、彼らは墓やミイラ等をセアंकとして所有していた。さらに、彼らは「セアंकのパン、肉、ワイン (*p3 kw p3 wuf p3 irp <n> p3 s'nh*)」(P. Ashmolean D 3: Reymond 1973: 63, no. 18)の支給を受ける権利も有していた。神の印璽官、ミイラ職人のセアंकは、彼らの仕事または地位に対して与えられていたものであり、彼らの間で譲渡されたり、世襲的に受け継がれたりしていた(Reymond

1973: 31-36, 44, 62, no. 14)。

b. 「セアンの耕地 ($3h\text{-}s^{(19)}nh$)」

P. Ashmolean D 16+17 には、「神殿楽師 (tnf)」, 「アヌビスの人 ($rmt\ n\ 'Inp$)」, 「神の印璽官, ミイラ職人」等, 葬送儀礼に関連したタイトルをもつ人々の間で, セアンの耕地を含めた様々な財産の売買・譲渡契約が行われたことが記録されている。ここでのセアンの耕地は, 「アヌビス (神) の領域を維持していくために, アヌビス (神) の領域に割り当てられた土地」であるとされており (Reymond 1973: 123, no. 15), セアンの耕地とは, そこでの収益が何者かの扶養もしくは維持のために利用される土地であると考えられている。こうしたセアンは, 地位や官職に対して与えられていたものとされている。(Vleeming 1991: 77-78, no. ee; Griffith 1909: 99, no. 3)

c. 「セアンの日 ($hrw\ n\ s^{(20)}nh$)」

「セアンの日」とは, 神殿や聖地での礼拝式の日のことであるが, これも一種の財産として, 売買契約や賃貸借契約における取引の対象となっていた。それは, 礼拝式の日に関連した義務を果たす者には, それに応じて報酬が与えられることになっていたためである。(Allam 1990: 17; Johnson 1986: 78-79; Reymond 1973: 113-114)

d. 「(親の財産の中から) ~に割り当てられたセアン ($tni.t\ s^{(21)}nh$)」

Rendell Papyrus には, 両親の財産を相続した兄が, その一部 (建築物, 不動産, 複数の墓と埋葬からの収入) を弟に分与したことが記録されている。その中で, 兄は弟に分与した財産を, 彼らの両親の全財産の中から「あなた (= 弟) に割り当てられたセアン ($by=k\ tni.t\ s^{(21)}nh$)」と表現している。

P. Cairo 50058 には, 父親の財産を相続した兄弟が, それぞれが相続した財産を再分配したことが記録されている。兄は弟に神官職, 書記の官職, 不動産等を与え, それら以外の遺産全てを獲得した。ここでも, 兄は弟に与えた財産を, 彼らの父親の全財産の中から「あなた (= 弟) に割り当てられたセアン」と表現している。

P. Carlsberg 39a では, ある女性が墓等を売却したことが記録されている。ここでは, 彼女が売却した財産は, 彼女の父の全財産中の「私 (= その売却した女性) に割り当てられたセアン ($by=y\ tni.t\ s^{(21)}nh$)」に含まれるものと表現されている。

以上の例から、セアंकと呼ばれる財産の特徴として、以下の2点を挙げる事ができると思われる。

第1に、セアंकは、何らかの資格を有する人に対して所有が認められていた。例えば、「神の印璽官、ミイラ職人のセアंक」や「セアंकの耕地」は地位や仕事に対して与えられていた。「セアंकの日」も、礼拝式に関連した義務を果たす者に報酬を与えていた。また、「(親の財産の中から)～に割り当てられたセアंक」は、遺産相続に関連して兄から弟へ与えられている。当時、「最年長の息子」が遺産相続において法的に優位な存在であったことと、⁽²²⁾「最年長の息子」以外の子供たちも親の財産を相続することができたことを考慮すると、弟には、兄の権限のもとで親の財産を相続する資格が認められていたと考えられる。

第2に、セアंकは、ある条件の下で所有することが可能な財産であった。例えば、神の印璽官、ミイラ職人のセアंकは、「神の印璽官、ミイラ職人」によって利用され、彼らの間で契約に基づき売買・譲渡されていたが、そこにはセアंकがネクロポリスに属する財産であるという前提があった。セアंकの耕地やセアंकの日もまた、神殿や聖地等に属していた。また、親の財産と関連したセアंकに関しても、弟がセアंकを所有する前提として「最年長の息子」の存在があった。

以上、セアंक文書以外の用例からセアंकの概念を検討したが、その意味はセアंक文書のセアंकにも当てはめることができよう。すなわち、セアंक文書における妻のセアंकとは、妻の扶養を目的として妻から夫に委託される財産ではなく、妻が何らかの資格や条件によって所有を認められた財産を意味する名称である。もし、「セアंक」という言葉が本来有する「扶養」という意味を考慮するならば、それは夫とは関係なく、その財産自体に妻の生計を支える何らかの意味合いがあったと考えるべきであろう。したがって、セアंक文書は、夫の妻への扶養義務を明確化した「扶養文書」でも「年金契約」でもなく、妻のセアंकが夫に委託されたことに関連して生じる、夫婦間の権利・義務関係を明示することを主旨とした財産契約文書であると考えべきである。

IV. 延滞料

セアंक文書の主旨が、従来考えられてきた夫の妻に対する扶養義務の明確

化ではなく、妻から夫への財産委託によって生じる権利・義務関係の明確化であるとすれば、従来、妻の扶養義務に関連して解釈されてきた、妻の生活費および延滞料の条項 (③・④) についても、再検討の必要が生じるだろう。

セアंक文書と他の 2 形式の夫婦財産契約文書との違いは、妻から夫に委託される財産そのものにおいて、委託財産の所有権と返却に関する妻の権利を保障しているという点では共通していることを先に示した。そうすると、他の形式の夫婦財産契約文書に記録された、妻の生活費および延滞料に関する条項から、セアंक文書の同じ条項の意味を検討することは可能となろう。

妻から夫への「妻になるための金銭」の委託を記録した夫婦財産契約文書 P. Köln 2412 (Lüddeckens 1968: 29-33) と P. Cairo 50129 (Lüddeckens 1960: 134-137; Erichsen and Nims 1959: 129-130) では、夫が妻から委託された財産を返却しなければ、夫は年間一定量の穀物や金銭や油等を妻の生活費として与えると約束している。「私が上 (記) の銅500 (デベン) (=『妻になるための金銭』) を上 (記) のことに従って上 (記) の30日以内にあなたに与えなければ、私があなたに上 (記) の銅500 (デベン) を与えるまで、私はあなたに生活費を、上記の生活費に従ってエンマ小麦と銅を与える。 (*hw=y tm tl.t n=t ḥḏ 500 nty hry hn p3 hrw 30 nty hry r ḥ [p3 nty hry hw=y] tl.t n=t ('q ḥbs r ḥ p3 ('q ḥbs nty sh hry p3 bt(?) ḥḏ ḥmt sh hry š'-hw=y tl.t n=t ḥḏ 500 nty hry)*)」(P. Cairo 50129, Lüddeckens 1960: 134-137), 「私があなたに上 (記) の銅140 (デベン)=『妻になるための金銭』を与えなければ、私はあなたに小麦 2/3 1/12 (アルタバス) と、1 ロクのごま油と、銅 3 (デベン) ……あなたの生活費 (として)、あなたの費用として毎月与える。また、1 年間に洗練された銀75 (デベン) を与える。 (*hw=y tm tl.t n=t p3 ḥḏ 140 nty hry hw=y tl.t n=t sw 2/3 1/12 irm lk nh w' irm ḥḏ 3 ḥḏ ir[...]p3y=t ('q ḥbs nh [p3]y=t ḥḏ ir hy' hr¹ lbt nb irm ḥḏ 75 wth w'.t rnp.t)*)」(P. Köln 2412, Lüddeckens 1968: 29-33)

つまり、妻に与えられる生活費とは、委託財産の返却が遅れた場合に夫が妻に支払う延滞料として扱われている。こうした、妻に生活費が与えられる理由を示す記述は、同種の別の文書には見られない。このことは、このような記述が、当時、文書を作成する上で省略可能なものであったことを示しているものと考えられる。この他、委託されている財産の名称は不明であるが、内容から夫婦財産契約文書と考えられる 2 通の文書、P. BM 10593 (Lüddeckens 1960:

76-81) と P. BM 10594 (Lüddeckens 1960: 80-83) にも、妻に支給される生活費が、委託財産の返却が遅れた場合の延滞料であることを示す記述が見られる。

こうした例と比較すると、セアंक文書の生活費および延滞料に関する条項(③・④)では、妻に生活費を支給する理由を説明する記述が省略されていた可能性が考えられる。つまり、これらの2条項は、従来考えられてきたような、結婚生活における夫から妻への生活費の支給に関して規定している条項ではなく、セアंकの返却が遅れた場合に夫が妻に支払わなくてはならない延滞料を規定している条項であったと結論づけられよう。したがって、セアंक文書の財産契約の要旨は以下のように考えてよいであろう。(下線部分が筆者による解釈)

<財産契約要旨>

- ① 夫は妻からセアंक (s'ānā) を受け取った。
- ② 夫婦の間に生まれる／生まれた子供が夫の財産の相続人となる。
- ③ セアंकの返却が遅れた場合、夫は妻に年間一定量の穀物と銀を妻の生活費として与える。
- ④ 妻は、セアंकの返却が遅れた場合に夫が負担することになる妻の生活費、すなわち、セアंकの返却が遅れた場合の延滞料⁽²³⁾に関して、権限を有する者である。
- ⑤ 夫の財産はセアंकとセアंक文書に明記された妻への義務に対する担保である。
- ⑥ 夫の方から一方的に妻にセアंकを返却することはできない。セアंकは妻が望む日に返却される。
- ⑦ 夫は法廷以外で妻に宣誓を課すことができない。

また、セアंक文書は、返却を考慮した財産の移動に関連して生じる、当事者間の権利・義務関係を明示することを主旨としているという点で、当時、ローン契約の際に作成されていた文書とも共通していると言える。ローン契約文書では、返済が遅れた場合、債務者は債権者に罰金を支払わなくてはならないことが明記されている。⁽²⁴⁾ ゆえに、セアंक文書で、セアंकの返却が遅れた場合に夫が妻に支払う延滞料のことが考慮されていたと考えることは、当時の財産契約一般から見ても不自然ではないと言えよう。

さらに、セアंक文書の関連史料からも、妻の生活費がセアंकの返却が遅れた場合に夫が妻に支払う延滞料である可能性を示すことができる。

次の3例は、夫婦がセアंक文書の契約を破棄するために作成した文書からの引用である。妻たちは、セアंकを返却した夫に対して、以下のように言っている。(1)「あなた(=夫)は私(=妻)に完全に支払った。あなたは、(私のセアंकの)銀と、生活費と、前述のセアंक文書に記録されている全てのもので、私の心を満足させた。今日、あなたは私にそれらを与えた。私は、あなたの手から、それらを受け取った。それらは完全であり、どんな残りもない。」(P. Hamburg D 7: Lüddeckens 1998: 135-141, Taf. 18), (2)「あなた(=夫)は私(=妻)に(私のセアंकの銀を)完全に支払った。あなたは私に、私があなたと決めていた、それに関する過料を支払った。」(P. Cairo 50131: Lüddeckens 1998: 200-204, Taf. 25), (3)「あなた(=夫)は私(=妻)に(私のセアंकの銀を)完全に支払った。あなたは、それに関する過料と、それらに関する全てのもので、私の心を満足させた。私はそれらをあなたの手から受け取った。私の心はそれらに関して満足している。それらは完全であり、どんな残りもない。」(P. Hamburg D 3: Lüddeckens 1998: 237-242, Taf. 30)

妻が夫からセアंक以外に受け取ったものに注目したい。(1)では「生活費と、前述のセアंक文書に記録されている全てのもの」、(2)では「それに関する過料」、(3)では「それに関する過料と、それらに関する全てのもの」である。この3通は同じ目的で作成された文書であり、上記も同じ文脈の中で記録されている。ゆえに、(2)と(3)の「過料」は(1)の「生活費」に相当するはずである。そして、その「過料」は、(2)で示されているように、夫婦の間で、あらかじめ、セアंक文書作成時に決められていたものであった。このことから、妻の生活費が、セアंकの返却が遅れた場合に夫が妻に支払う延滞料であることが考えられる。

また、妻の生活費が、セアंकの返却が遅れた場合の延滞料であるとする、以下に挙げる史料に関しても従来とは異なった解釈が可能であろう。

次のセアंक文書では、セアंकの他、妻の生活費に対しても担保が考慮されている。これは、生活費がセアंक返却の延滞料としてあらかじめ考慮されていたことを示す例であると考えられる。(下線部は筆者による解釈)「私(=夫)が所有しているものと、[私が獲得することになるもの]は全て、[上記の]

[あなた (=妻) のセアंक] と、上記のあなたの生活費、すなわち、延滞料
[の担保] である。」(P. Michigan 4526 A I: Lüddeckens 1960: 148-151)

次の例は、プトレマイオスX世とクレオパトラ・ベレニケIII世の治世21年ペレ
ト3月28日に作成されたセアंक文書に書き込まれた記録である。⁽²⁵⁾「治世30年
シエムウ1月末日の彼 (=夫) の訴訟⁽²⁶⁾(?) 39ヶ月 生活費。治世30年シエムウ
1月以降、彼女 (=妻) は、彼女の生活費に関して、彼に対して請求権をもた
ない。」(P. BM 10606: Lüddeckens 1998: 158-168, Taf. 20)

セアंक文書が妻の扶養を目的として作成されるものであるなら、セアंक
文書が作成されてから妻が生活費の請求権を失うまでの110ヶ月間、妻は夫から
生活費を支給されていなければならない。しかし、「39ヶ月 生活費」とある。
「生活費」をセアंकの返却が遅れた場合に夫が妻に与えなければならない延
滞料と考えるならば、次のような解釈が可能である。妻は夫にセアंकの返却
を要求した。夫は39ヶ月の間セアंकを返却することができず、その間、延滞
料として妻に生活費を支給していた。そして、治世30年シエムウ1月、夫は妻
にセアंकを返却し、同時に、延滞料の支払義務からも解放された。それゆえ、
妻の生活費に関する請求権は消失したのではないだろうか。

プトレマイオスVIII世とクレオパトラIII世の治世42年ペレト2月6日に作成さ
れたセアंक文書にも、同様な記述が書き込まれている。「治世43年ペレト2月
23日、神殿で(?)記した。13ヶ月 生活費。治世43年ペレト3月10日以降、彼
女 (=妻) は、彼女の生活費 (に関して)、彼 (=夫) に対して請求権をもたな
い。」(P. Cairo 30607: Lüddeckens 1960: 158-161)

セアंक文書が作成されてから妻の生活費に関する請求権が消失するまでの
期間は13ヶ月であり、テキストに記された「13ヶ月」と一致している。「生活費」
をセアंकの返却が遅れた場合に夫が妻に与えなければならない延滞料と考
えるならば、ここでは、妻がセアंकの返却を要求したのと同じ時期にセアंक
文書が作成され、13ヶ月間延滞料としての生活費が支給されたと考えることが
できる。⁽²⁷⁾

セアंकが夫から妻に返却されるのは、セアंक文書では明記されていない
が他形式の夫婦財産契約文書の多数の例で言及されているのと同様、夫婦が離
婚する場合であったと考えられる。⁽²⁸⁾離婚した女性は、経済的に不自由するもの
と考えられており、⁽²⁹⁾それゆえ、すぐにセアंकを返却しない夫に対して、延滞

料として穀物と金銭を妻に支給することが義務づけられていたのは、セアンの返却がなされるまでの間妻の経済的生活を保障するためであったのではないだろうか。このことは、夫が妻を扶養するのは当然の義務であったという当時の社会慣習に関する見解と一致している。

V. おわりに

妻が夫に委託するセアンは、妻の「扶養料」もしくは「年金」ではない。また、セアン文書も、「扶養文書」もしくは「年金契約」ではない。妻のセアンとは、妻が何らかの資格や条件によって所有を認められている財産であり、セアン文書は、妻のセアンが夫に委託されることに関連して生じる夫婦間の権利・義務関係を明示することを主旨とした財産契約文書である。夫は妻に、夫の財産をセアンの担保とすること、おそらく離婚に際して、妻がセアンの返却を求めたら速やかに応じること、また、すぐにセアンを返却できない場合は、返却するまで延滞料を支払うことを約束し、セアンとその返却に関する妻の権利を保障していた。

本稿の結論により、今後のセアン文書研究の焦点は、妻の扶養義務の問題から、セアンと呼ばれる財産そのものをめぐる問題に移行され得るものと思われる。セアンはどのような女性によって所有されていたのか、また、セアンの委託はどのような背景で行われていたのか等という問題である。こうした問題は、夫婦財産契約文書で、妻から夫に委託されていたことが記録されている3種類の財産——「女性の財産」、「妻になるための金銭」、「セアン」——が意味する根本的な違いは何かという問題のみならず、当時の財産所有や婚姻における女性の立場を解明する手がかりとなり得るだろう。

注

- (1) これはベストマンの分類に拠る (Pestman 1961: 21-50)。彼は文書に記録されている財産の種類や、文書の名称の違いに着目して分類した。なお、この他にも、従来、様々な分類がなされてきた。それらに関しては筆者の修士論文 (小野 2001: 51-66) を参照のこと。
- (2) 支払文書はセアン文書の契約を補強するために作成された補助文書であるため、ここでは考察対象としない。
- (3) セアン文書の形式で作成された最古の文書は P. O. I. (=Oriental Institute)

- 17481 (前 365/4 年) (Hughes and Jasnow 1997: 9-15, Pls. 1-7) であるが、別の形式の財産契約文書 P. Cairo 50059 (Spiegelberg 1932: 42-46, Taf. 18-20) と P. BM (=British Museum) 10792 (Shore 1988: 200-206, Pls. 41-42) (ともに前 522年) に、セアंक文書に関する記述が見られる。最も新しいセアंक文書は P. Michigan 347 (後 21年) である。(P. は Papyrus の略)
- (4) 夫の父親や妻の父親がセアंक文書の作成に関わることもあった。: P. Cairo 50059; P. BM 10792; P. Bibl.Nat. (=Bibliothèque Nationale) 219.
- (5) 転写は Hughes and Jasnow に拠った。訳は Hughes and Jasnow の訳を筆者が日本語訳したもの。なお、Hughes and Jasnow はセアंकを「年金 (annuity)」としている。
- (6) 条項分類はリュートデッケンス (Lüddeckens 1960: 254-333) に拠る。
- (7) “maintenance” (Smith 1962: 175; Depauw 1997: 140), “nourishment” (Smith 1995: 49), “alimentary sum” (Boak 1926: 100-109), “aliment” (Edgerton 1931: 6-9), “Alimentation” (Junker 1921; Allam 1985: 42; Allam 1975: 1172; Grunert 1978: 118); Spiegelberg, W., *Demotische Papyri*, I, 1923, 41f. ※原典にあたれず Nims 1938: 75 を参照した。), “annuity” (Griffith 1909: 99, no. 3 and 113; Hughes and Mattha 1975: 92; Johnson 1994: 113-132; Hughes and Jasnow 1997: 80) その他、「持参金」や「寄金」という訳語も知られている。“Dotation” (Lüddeckens 1960: 314; Allam 1975: 1172), “Ausstattung” (Lüddeckens 1975: 1183, no. 11, Lüddeckens 1998: 294, “Ausstattungs-geld” (Lüddeckens 1982: 152-155), “endowment” (Nims 1938: 75-77; Nims 1958: 237-246; El-Amir 1953: 139-150; Erichsen and Nims 1959: 129-132; Martin 1995: 67; Smith 1995: 53; Hughes and Jasnow 1997: 80; Bagnall and Keenan 1998: 158-169; Thompson, S. H., *A Family Archive from Siut*, Oxford, 1934, 12, no. B 8 (※原典にあたれず Nims 1938: 75 を参照した。)) しかしながら、このような訳語が提示されていても、それらは夫が妻を扶養するための財産であると認識されているので、「セアंक」の概念としては「扶養料」や「年金」と同じであると思われる。
- (8) 妻の書には「女性の財産」の委託が記録されていないものもある。それらについては Lüddeckens 1960: 339-352 を参照のこと。ここでは記録されている文書のみを考察対象とする。
- (9) 考察対象史料は次の通りである。(ここで筆者が参照した史料や参考文献は小野 2001: 9-11, 21-24 およびその付録の史料集を参照のこと。) 妻の書: P. Adler 14; 21; P. Berlin 13593; 15830; P. Cairo 50149; P. Frankfurt; P. Hauswaldt 4; 6; 14; 15; P. Heidelberg 701; P. Rylands 16; 20; 22; 27; 28; 30; 37; 38; P. Straßburg 43; 56; P. Turin Cat. 2129. 「妻になるための金銭」のことを記録した文書: P. BM 10607; 10609; P. Cairo 50129; P. Hamburg D 35; P. Köln 2412. セアंक文書: P. Bibl. Nat. 219; 224; P. BM 10591 Rec. I 9; 10591 Rec. VI 21-VII 5; 10603; 10605; 10606; 10608; P. Cairo 30607; 30608; 30616b; P. Carlsberg 34; 35; P. Hamburg D 14; P. Heidelberg 10; P.

Louvre 2347; 3265; P. Michigan 347; 4526 AI; P. O. I. 17481; 25256; 25257; 25259; 25388.

- (10) ペルシア支配時代に導入された、銀に基づく度量衡の単位。Lüddeckens 1998: 8, Nr. 15; Vleeming 1991: 87-89; Pestman 1961: 38, no. 4 and 105; Lüddeckens 1960: 316-317 を参照。
- (11) 銅から銀への換算と小麦の価格については Pestman 1993: 347, 350 を参照。
- (12) P. Cairo 50149 を除く、注 9 で挙げた妻の書全てに記録されている。
- (13) 「妻になるための金銭」のことを記録した文書では、注 9 で挙げた全ての例に記録されている。また、妻の書では P. Turin Cat. 2129 のみ記されている。
- (14) 妻の書で委託財産の所有権と返却に関する妻の権利を保障していると考えられる記述は以下の通りである。「女性の財産」の受取および財産目録(注 9 に挙げた全ての妻の書)、「あなた(=妻)が内にいるときは、それら(=女性の財産)もあなたとともに内にあり、あなたが外にいるときは、それらもあなたとともに外にある (*hw=t hn hw=w hn irm=t hw=t bnr hw=w bnr irm=t*)」(P. Lonsdorfer I. Lüddeckens 1960: 20-21) のような表現 (P. Hauswaldt 4; 6; 14; 15; P. Berlin 13593 を除く全ての例)、「あなた(=妻)はそれら(=女性の財産)の使用者である。私(=夫)はそれらの保管者である。(*mtw=t p*y=w sy ink p*y=w shf*)」(P. Turin Cat. 2129. Lüddeckens 1960: 82-87) のような表現 (P. Berlin 13593; 15830 を除く全ての例。なお、P. Hauswaldt 4; 6; 14; 15 では後半の表現 (*ink p*y=w shf*) のみ記されている。)、夫婦が離婚する日に、夫は妻に「女性の財産」の品物あるいはその価値の金銭を返却すると約束している条項 (P. Berlin 15830 と P. Cairo 50149 を除く全ての例)、夫は妻に、妻が「女性の財産」を夫の家に持ってこなかったと言って法廷で妻に宣誓を課さないと約束している条項 (P. Berlin 13593; 15830; P. Cairo 50149; P. Straßburg 56 を除く全ての例)、夫が妻に、妻は「女性の財産」に関して夫に対して権限を有する者であること、および、夫は妻に対して訴訟を起こさないことを約束している条項 (P. Berlin 13593; 15830; P. Cairo 50149; P. Hauswaldt 4; 6; 14; 15; P. Straßburg 56 を除く全ての例)。

また、「妻になるための金銭」のことが記録されている文書では、以下の記述によって委託財産の所有権と返却に関する妻の権利が保障されていると考えられる。「妻になるための金銭」の受取(注 9 で挙げた全ての例)、夫が妻に、妻が「妻になるための金銭」の返却を要求する日あるいは夫婦が離婚する日から30日以内に、「妻になるための金銭」を返すと約束している条項(全ての例)、夫が妻に、30日以内に返却しない場合は返却するまで生活費を与えると約束している条項 (P. Cairo 50129; P. Köln 2412)、夫が妻に、夫の全財産は「妻になるための金銭」のことが記録された文書の権利(*hp*)に対する担保であると約束している条項(全ての例)、夫は妻に、「妻になるための金銭」のことが記録された文書に関して、嘘の言明は行わないと約束している条項 (P. Köln 2412 を除く全ての例)。

- (15) 宣誓に関して言及されている条項 (⑦) の内容は、セアंक文書特有である。しかしながら、この条項に関しては不明な点が多いため、ここでは取り扱わない。
- (16) ここでは、動詞の「セアंक (扶養する)」(*s'nh*) や「へム-セアंक (彫刻家)」(*hm-s'nh*) 等、財産を呼ぶ名称以外の用例は取り上げない。また、セアंक文書と関連して知られている女性のタイトル「セヘメト・エン・セアंक (セアंकの女性)」(*shmt n s'nh*) に関しては、おそらく本稿での検討がその意味の解明に役立つことになろう。
- (17) P. Ashmolean D 1; 3 (Reymond 1973); P. BM 10604; P. Cairo 50126; P. Hamburg D 2; 3; 4; 5 (Lüddeckens 1998) 等。夫の財産が列挙されている表現の中に「神の印璽官、ミイラ職人のセアंक」が含まれているセアंक文書もある。例：P. BM 10603; 10605; 10606 (Lüddeckens 1998)
- (18) 「神の印璽官、ミイラ職人のセアंक」とネクロポリスの関係については Reymond 1973: 62, no. 14 を参照のこと。
- (19) P. Ashmolean D 16+17 (Reymond 1973: 112-126, Pls. 12-13) 等。この他 P. Lille 24からも同様の表現が知られている：“40 arouras of land as my stipend” (※原典 (H. Sottas, *Papyrus Démotiques de Lille*, Paris, 1921, 49ff., Tf.11 および Malinine and Pirenne, in *AHDO* 5, 1950-1, Urk. 27) にあたることができず, Vleeming 1991: 77 から引用)
- (20) この用例に関しては、原典 (G. Botti, *L'Archivio Demotico da Deir el-Medineh*, Catalogo del Museo Egizio di Torino, Serie prima, Vol. 1, Florenz) にあたるできなかった。
- (21) P. Cairo 50058 (Spiegelberg 1932: 39-42, Taf. 17; Erichsen 1950: 17-21; Johnson 1994: 113-132); P. Carlsberg 39a (Lüddeckens 1998: 77-81, Taf. 9 und 10); Rendell Papyrus (Hughes and Jasnow 1997: 63-70, Pls. 58-62)。
- (22) 「最年長の息子」は、実際最年長者でなくてもよかった。(Hughes and Mattha 1975: 123)
- (23) “*ḥ wḏ.t n p̄y=t' q ḥbs*”という表現は、従来、「あなたの生活費の延滞料」と訳されてきたが、前置詞 “*n*”には同格を導く用法もあるため (Erichsen 1954: 201), 「あなたの生活費、すなわち、延滞料」と解釈することは十分可能であると思われる。
- (24) ローン契約文書は、債務者が債権者に対して発行する文書であり、債務者が債権者から金銭を受け取ったことを証明し、かつ、その金銭を確実に債権者に返却することを担保や罰金に関する条項によって保障している。ローン契約文書の形式は次の通りである。①債権者は債務者に～を与えた。②債務者は債権者に～を返却する。③もし、債務者が債権者に期限通りに返却しなければ、毎月罰金が科せられることになる。④もし、債務者が返済しなければ、債権者は担保として列挙された品々を得てよい。債権者への支払が完全に終了するまで。⑤債権者がこの文書を保有している間は、債務者は債権者に支払ったと主張することはできない。(Porten 1992: 261)

- (25) 治世年から、この記録はセアंक文書に後から書き込まれたものと考えられる。
- (26) ここで言及されている「訴訟(?)」が具体的にどのようなものだったのかは不明であるが、セアंक文書に書き込まれている以上、セアंक文書の財産契約に関連して、夫婦の間で何らかの争いが起こったものと考えられる。
- (27) 従来、夫婦の間でセアंक文書が作成される時期については、夫の財産の相続人に関する条項(条項②)に見られる子供の表現のバリエーションから婚姻成立との関連性が議論されてきた(例えば Junker 1921: 33, 45-47) だけであり、詳しいことはわかっていない。こうした例の解釈を含めて、今後検討をしていく必要がある。
- (28) 委託財産の返却が離婚との関連で言及されている例: 「私があなたを追い出すことになる日、あるいは、あなたが私の妻でなくなるよう自分自身出て行くことを望む日に、私はあなたに上記の「女性の財産」の品目あるいは上記に応じてそれらの価値を金銭で与える。(p3 ssw h3' = t hm.t nty tw=y tr=f gr mtw=t tw.tr=t mr šm n=t h' = t r tm hpr tw=t mtw=y hm.t tw=y t.t n=t p3 smt n3y=t nkt.w s.hm.t nty hry gr sw.n.t = w n h4' r h p3 nty sh hry)」(P. Straßburg 43, Lüddeckens 1960: 116-119) 等。当時、結婚とは基本的に夫婦が「一緒に住み (trm hms)」, 「家庭を築く (grg pr)」ことであった。住居は夫の家であることが一般的であった。それゆえ、離婚に関して言及する際には、夫が妻を「追い出す／解放する (h3')」, あるいは、妻が夫の家から「出ていく (šm)」という表現が使用されていた。(Pestman 1961: 9, 50-51, 60, and 75) また、セアंक文書の条項③の「あなた (=妻) が好む家で (r p3' .wy nt mr=t s)」という表現も、妻がもはや夫の家にいないこと、すなわち、離婚を意味していると考えられている (Lüddeckens 1960: 263)。この表現の解釈については、「好む家」には「夫の家」は入らないのか等、まだ検討の余地があるように思われるが、当時の婚姻の基本的な概念を考慮するならば、夫婦の間でこのような表現が使用されること自体、不自然であるとは言えないだろうか。
- (29) 実際には、再婚するまで父親や兄弟等によって経済的に保護されていたと考えられている。(Pestman 1961: 77; Allam 1975: 1170-1171; Allam 1985: 52)

参考文献

- Allam, S. 1975: "Ehe," *LÄ*, Bd. 1, 1162-1181.
- Allam, S. 1985: *Some Pages from ... Everyday Life in Ancient Egypt*, Guizhe.
- Allam, S. 1990: "Women as Holders of Rights in Ancient Egypt (during the Late Period)," *JESHO* 33, 1-34.
- Bagnall, R. and J. Keenan 1998: in J. Rowlandson (ed.), *Women and Society in Greek and Roman Egypt: A Sourcebook*, Cambridge University Press, 158-160.
- Boak, A. E. R. 1926: "Alimentary Contracts from Tebtunis," *JEA* 12, 100-109.
- Depauw, M. 1997: *A Companion to Demotic Studies*, Bruxelles.
- Edgerton, W. F. 1931: *Notes on Egyptian Marriage: Chiefly in the Ptolemaic Period*,

- Studies in Ancient Orient Civilization, no. 1, Chicago.
- El-Amir, M. 1953: "Further notes on Egyptian Marriage and Divorce," *BIE* 34, 139-150.
- Erichsen, W. 1950: *Auswahl frühdemotischer Texte, Heft 1: Texte*, Copenhagen.
- Erichsen, W. 1954: *Demotisches Glossar*, Copenhagen.
- Erichsen, W. & Ch. F. Nims 1959: "A Further Category of Demotic Marriage Settlements," *AcOr* 23, 119-133.
- Erman, A. and H. Grapow 1982: *Wörterbuch der Ägyptische Sprache*, Berlin.
- Griffith, F. Ll. 1909: *Catalogue of the Demotic Papyri in the John Rylands Library Manchester: with facsimiles and Complete translations*, 3 Bde., Manchester.
- Grunert, S. 1978: "Zum Eherecht im ptolomäischen Ägypten nach den demotischen Papyri," *ZÄS* 105, 114-122.
- Hughes, G. R. & G. Mattha 1975: *The Demotic Legal Code of Hermopolis West*, Bibliothèque d'Étude, 2 Vols, Cairo.
- Hughes, G. R. & R. Jasnow 1997: *Oriental Institute Hawara Papyri: Demotic and Greek Texts from an Egyptian Family Archive in the Fayum (Forth to Third Century B. C.)*, Oriental Institute Publications volume 113, Chicago.
- Johnson, J. H. 1986: "The Role of the Egyptian Priesthood in Ptolemaic Egypt," in L. H. Lesko (ed.), *Egyptological Studies in Honor of Richard A. Parker*, Hanover, 70-84.
- Johnson, J. H. 1994: "'Annuity Contracts' and Marriage," in D. P. Silverman (ed.), *For His Ka: Essays Offered in Memory of Klaus Bear*, SAOC, no. 55, Chicago, 113-132.
- Junker, H. 1921: *Papyrus Lonsdorfer I*, Akademie der Wiss. in Wien, Sitzungsberichte der phil.-hist. Klasse, Bd. 197, Abh. 2, Wien.
- Lüddeckens, E. 1960: *Ägyptische Eheverträge*, Ägyptologische Abhandlungen 1, Wiesbaden.
- Lüddeckens, E. 1968: "Eheurkunde," *Demotische und koptische Texte*, Wissenschaftliche Abhandlungen der Arbeitsgemeinschaft für Forschung des Landes Nordrhein-Westfalen, Sonderreihe, Papyrologica Coloniensia, v. 2, 29-39.
- Lüddeckens, E. 1975: "Eheurkunden," *LÄ*, Bd.1, 1181-1183.
- Lüddeckens, E. 1982: "Mitgift," *LÄ*, Bd. 4, 152-155.
- Lüddeckens, E. 1998: *Demotische Urkunden aus Hawara; Umschrift, Übersetzung und Kommentar*, (unter Mitarbeit von R. Wassermann; nach Vorarbeiten von W. Erichsen und Ch. F. Nims; Bearbeitung der griechischen Registratur-Vermerke von R. W. Daniel), Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 28.
- Martin, C. J. 1995: "Marriage and the Family in Ancient Egypt: II. Marriages, Wills

- and Leases of Land: Some Notes on the Formulae of Demotic Contract,” in M. J. Geller, H. Maehler and A. D. E. Lewis (eds.), *Legal Documents of the Hellenistic World, Papers from a Seminar Arranged by the Institute of Classical Studies, the Institute of Jewish Studies and the Warburg Institute, University of London, February to May 1986*, London, 58-78.
- Nims, Ch. F. 1938: “Notes on University of Michigan Demotic Papyri from Philadelphia,” *JEA* 24, 73-82.
- Nims, Ch. F. 1958: “A Demotic ‘Document of Endowment’ from the Time of Nectanebo I,” *MDAIK* 16, 237-246, Pls. 17-20.
- Pestman, P. W. 1961: *Marriage and Matrimonial Property in Ancient Egypt*, Papyrologica Lugduno-Batava 9, Leiden.
- Pestman, P. W. 1993: *The Archive of the Theban Choachytes. A Survey of the Demotic and Greek Papyri contained in the Archive*, Studia Demotica 2, Leuven.
- Porten, B. 1992: “Aramaic-Demotic Equivalence: Who is the Borrower and Who the Lender?” in J. H. Johnson (ed.), *Life in a Multi-Cultural Society: Egypt from Cambyses to Constantine and Beyond*, SAOC, no. 51, Chicago, 259-265.
- Reymond, E. A. R. 1973: *Catalogue of Demotic Papyri in the Ashmolean Museum. Volume I Embalmers’ archives from Hawara*, Oxford.
- Smith, H. S. 1962: Review of *Ägyptische Eheverträge* (by E. Lüddeckens), “Ein Wiederentdeckte demotische Zahlungsschrift” *Acta Orientalia* 25, 238-249 (by E. Lüddeckens), and *Marriage and Matrimonial Property in Ancient Egypt: a contribution to establishing the legal position of the woman* (by P. W. Pestman), *JEA* 48, 172-176.
- Smith, H. S. 1995: “Marriage and the Family in Ancient Egypt: I. Marriage and Family Law,” in M. J. Geller, H. Maehler and A. D. E. Lewis (eds.), *Legal Documents of the Hellenistic World: Papers from a Seminar Arranged by the Institute of Classical Studies, the Institute of Jewish Studies and the Warburg Institute, University of London, February to May 1986*, London, 46-57.
- Shore, A. F. 1988: “Swapping Property at Asyut in the Persian Period,” in J. Baines, T. G. H. James, A. Leahy, and A. F. Shore (eds.), *Pyramid Studies and Other Essays Presented to I. E. S. Edwards*, London, 201-206, Pl. 42.
- Spiegelberg, W. 1906: “Der *αγραφος γαμος* in demotischen Texten,” *Rec. de trav.*, 28, 190-195.
- Spiegelberg, W. 1932: *Die demotischen Denkmäler III (50023-10165): Demotische Inschriften und Papyri*, Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire, Berlin.
- Vleeming, S. P. 1991: *The Gooseherds of Hou (Pap. Hou)*, Studia Demotica 3, Leuven.

小野幾代 2001：拙稿「プトレマイオス朝時代のデモティック文書における夫婦間の財産契約——セアंक文書 (*sh n s'nh*) の再検討——」(早稲田大学大学院文学研究科史学(西洋史) 専攻修士論文)